

忙しい街とのんびりした街の融合

～文学からみた都市再生のヒント～

エヴェリン・シュルツ（ミュンヘン大学）

1 序論

現代の都市論では、「都市再生」、「都市のルネッサンス」、「サステイナブル・シティ」などが重要な奥の深いキーワードになっており、それらは望ましい都市環境のあり方を再考する勢いを表している。その背景には、様々な社会現象と社会の現在および未来に関わる問題が潜んでいる。2008年頃から世界人口の半分以上が都市部で暮らすようになっており、21世紀の後半以降は、その割合が「3分の2」まで上昇すると目されている。しかし、先進諸国では、人口は減少するのに高齢者が増加するため、社会活性が低下する恐れがある。日本の人口はすでに衰退しているようである。また、日本では都市の在り方に波紋を投げかけるもう一つの傾向がある。都心回帰の傾向が顕著になりつつあることと関連して、地方では「都市の収縮」が強まる傾向があるのである。こうした人口移転と都市の在り方の変遷は、社会や国家や環境などに大きな影響を与える。現代の都市社会は一見豊かに繁栄しているようであるが、その裏側には環境悪化や精神的疎外など多くの歪みが認められる。

原因は複雑で多様である。重要な原因の一つは、近代の都市計画の思想、特に戦後の日本の都市発展いわゆる当時の「都市再生」の在り方にある。戦後の高度成長と急激な都市発展によって歴史的な都市景観の破壊と歴史的な建物の改築と新築が進み、全国各地で伝統的な街並みと歴史的な市街地景観が次第に失われてきた。戦後の「都市再生」政策は主に経済優先を基に

した「都市再生」であり、自動車優先の都市開発でもあった。現在の日本の都市を見渡すと、立派な商業施設やオフィスビルがいたるところに建設されており、都市はまた自動車のためのものではないかとも思われる。モダンな都市では、機械が生み出す「スピード」や「合理性」が人間の身体を支配している。

昔どこでもあったのんびりした地域性の豊かな街は数え切れないほど崩壊してしまった。田舎でも都会でも、日本のいたるところで、住民の暮らしの環境と日常生活の在り方は、こうした都市再生政策によって大きく変わってきた。たとえば、マンションに住むことによって人々のつながりが薄くなってしまった。最近では、マンションにおける高齢者の孤独死の増加が話題になっている。また、ニューメディアは産業や家庭や地域社会、つまり人間関係と都市構造などに大きな影響を与えている。今まではそれが町を活性化して人々を豊かにするものだと信じられてきた。

しかし、日本のみならず世界中の都市において環境問題や防災対策、先進国での高齢者の増加と少子化などが深刻になった現在では、以前の「都市再生」の意味、つまり成長型の都市計画を考え直す必要が出てきた。そういった社会背景を前にして、現代都市論では、以前の都市再生政策を見直しながら都市空間の新しい秩序を探求していこうとする傾向が強くなっている。都市とは誰のためにあるのだろうか。豊かな都市生活とはどのようなものか。人間にとって本

当に必要なものは何か。それを問うことが、これからの「都市再生」の鍵を握っていると言える。そういう文脈の中で、日本型の都市空間への憧れ、特に、生活空間としての路地裏の再生は比重が高い。たとえば、建築家黒川紀章は、2006年に出した『都市革命』という都市論で、路地の復権は都市の未来の鍵であると指摘している。¹ 黒川の論文だけでなく、現代日本の都市再生の重要性を強調する建築論と都市論では、路地は日本型の都市空間のモデルとして認められて、重要な役割を果たすようになってきたようである。²

2 路地

2.1 路地の在り方

路地のような都市構造はたいてい歴史の長い都市にある。路地はいろいろな特徴をもっている。具体的に言えば、路地は細長い道路あるいは幅のせまい街区で、だいたい幅3メートルぐらいの、自動車が通れない道路である。多くは植木鉢が並んでいる。



【早稲田周辺の路地】

路地の特徴の一つは、公的空間と私的空間の区別が多くの場合難しいというところである。本来の路地には、必ず井戸と神社があった。路

地は、昔から生活の匂いのする庶民の暮らしの場であった。例えば、フランス人画家ビゴは、明治時代に、庶民の生活様式に興味を持ち、路地の風景も描写した。³ 路地は貧困階層の過密居住地区でもあったし、江戸時代の裏町の路地は寄場や売春などの場所でもあった。日本近代文学の代表的な作家である永井荷風は、路地を江戸時代の記憶の場ととらえていた。

路地はまた、下町生活の記憶として理解されていることもある。⁴ 路地の形は様々だが、決まった都市計画の模型としての路地もある。近代発展の流れに従って路地の在り方が変わってきた。明治時代の市区改正政策を出発点にして、路地は困窮の印として批判され、反文明的で不衛生的などとして、近代日本の進歩主義と近代都市計画に対立する空間として評価されてきた。二十世紀にかけて、都市開発と工業化によって路地がだんだん取り払われ、その土地は新しい、最も近代的な住宅と大通りに建て替えられてしまった。そのため、昔のまま残されている路地はわずかしかない。実際、路地は、把握しにくい曖昧な都市空間である。

最近の路地論では、理想の都市空間としての路地に最もウエートが置かれるようになった。理想の路地とは、歴史と伝統とのつながりを表現する豊かな生活空間としての町である。

2.2 理想あるいはアイデアとしての路地

理想あるいはアイデアとして評価されているのは、結局、昔のままの路地ではなくても路地らしい街区である。私の言うアイデアとしての路地とは、柔らかい人間性のある都市空間である。そこで暮らしている人々は余裕を持って心の安らぎを得ている。子供たちはそこで遊んだりしているが、お年寄りにとっての路地はお隣

¹ 黒川紀章『都市革命』中央公論新社、2006、p. 86.

² 例えば、青木仁『日本型まちづくりへの転換—ミニ戸建て・細街路の復権』学芸出版、2007、と宇杉和夫、青木仁、井関和朗、岡本哲志『まち路地再生のデザイン—路地に学ぶ生活空間の再生術』彰国社、2010.

³ ビゴ[著]、芳賀徹[ほか]編『ビゴ素描コレクション』岩波書店、1989、3冊.

⁴ 桑原甲子雄『東京下町 1930』河出書房新社、2006.

さんとおしゃべりする場所である。つまり、路地はのんびりした街の典型なのである。

都市研究者久繁哲之介が『日本版スローシティ』というまちづくり論で、スローシティの5つの条件を挙げている。⁵

- (1) ヒューマニズム：人間中心の公共空間を、ゆっくり歩ける。
- (2) スローフード：地域固有の食を、ゆっくり味わえる。
- (3) 関与・地域固有の文化・物語に、市民が関与(参加)できる。
- (4) 交流：ゆっくり話せる・観られる・癒やされる。
- (5) 持続性：市民のライフスタイル・意向を把握する。

日本の都市でこの5つの条件に該当する空間は、路地型の街である。

路地を体験するには、二つの方法がある。路地に住むことと路地を散歩することである。最近、路地を案内する著書が数多く出版されている。たとえば、『日本の路地裏』という写真集に目を通すと、路地を経験するには路地をゆっくり歩き回ればよいという印象を受ける。⁶ こうした路地は、岡本哲志が言うように、身体と感覚で探られる場所である。⁷

このような路地のイメージは、文学にもよく出ている。たとえば、感情や憧れなどに溢れた路地のイメージは、現代詩人長田弘の『路地』という散文詩にありありと表現されている。長田宏によると路地は、日本的な美、四季を味わえる、「香り」を楽しめる都市空間であり、住み心地のいい場所である。⁸

現在の路地論における路地は、そういった豊かな人間性のある人情にあふれた都市空間とし

てとらえられている。それに路地は、庶民の生活様式を保存した場、つまり、まちの記憶の場として描写されている。言い換えれば、路地は、建築物と道路によって構成された都市環境であり、歴史と個人の記憶・回想との複雑な関係を生み出す都市空間としてとらえられている。



[スローダウンゾーン]

3 都市観察と都市研究の方法としての都市散歩

そういう複雑な関係を代表するものの分析を試みたのは、ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミン Walter Benjamin (1892-1940) であった。ベンヤミンは、近代の都市を分析するために、都市遊歩者、つまり、フラヌールを近代都市の典型的な都市生活者として論理的に扱った。ベンヤミンの都市遊歩者の特徴は次のとおりである。

- 1) フラヌールは、19世紀のパリに由来する。彼のゆっくり歩き回る都市空間は、たいてい、アーケードのパサージュとそこにある商店街などである。
- 2) フラヌールは、こうした都市空間を気ままに歩き回りながら、そこで行われている出来事、流行、風俗の変化、新しい商品などを、観察する。
- 3) フラヌールは、かならず男性である。
- 4) 彼の当てのない散歩に出かける慣習は、空間的な自由を意味している。
- 5) ここで念頭に置いていただきたいのは、フラヌールは、現在だけを刮目するの

⁵ 久繁哲之介『日本版スローシティ』学陽書房、2008、pp. 132.

⁶ 佐藤秀明『日本の路地裏』ピエブックス、2005.

⁷ 岡本哲志『江戸東京の路地』学芸出版社、2006.

⁸ 長田宏『深呼吸の必要』晶文社、1984、pp. 74-75.

ではなく、むしろ考古学者のように、近接の過去を究明しようとしているという点である。彼は都市で行われている出来事の記憶者のようである。

6) フラヌールは、急ぐことはない。⁹

近代および現代の日本でも、都市文学作品だけでなく、一般的に都市の変遷ぶりをテーマにした書物にも、都市を散歩する人々がよく登場する。この種の本は東京に関するものが圧倒的に多い。このような東京文学の傾向は最近新たに強くなったが、一方、内容においては多角的になっている。¹⁰

東京は明治維新から現在にいたるまで非常に激しい変化を受けてきた。言うまでもなく、都市は常に多様性・流動性を持ち、耐えず変動するもので、東京も例外ではないが、東京では昔のまま保存されている建物がわずかしかないし、本格的な路地もとても少ない。東京の変容のうちもっとも影響の大きな出来事は、明治維新以外では関東大震災である。当時、東京の大半が焼き払われてしまった。江戸時代から残っていた建物はほとんどすべて消えてしまった。震災後の復興政策によって、東京の首都性を高める都市計画事業が興された。続く歴史的事件は、東京大空襲であった。戦後の急速な工業化は、特に東京湾に大きな影響を与えた。東京の工業化と拡大は、一方で戦後日本の復活の象徴になり、他方では発展のマイナス効果をもたらした。例えば東京湾では、廃水により漁業被害が多発した。隅田川の汚染もとてもひどかった。60年代には、東京オリンピックの開催にむけて、種々

の整備がなされた。たとえば、東海道新幹線と東京モノレールの開業、首都高速道路と名神高速道路の整備、そして環七通りと六本木通りの拡幅と整備である。そのあと、80年代のバブル経済とそれに伴う建設ブームがあった。その代表的な象徴の一つは、新宿の東京都庁舎である。

現在の東京では、再開発や再生のプロジェクトがいたるところで行われており、まさに目白押しである。なかでも、グローバル化している東京を象徴する汐留や品川、六本木ヒルズなどでの巨大な再開発が目立ち、忙しい街あるいは私の言うファストシティの例となっている。

4 東京散歩文学によるのんびりした街・路地発見

次に、日本文学では、そういう変遷の多い都市空間がどういうふうに描写されているか、という問題について考えてみたい。東京の文化、地理と歴史などを論じる書物は数えられないほどある。その中には、ルポルタージュ、小説（歴史小説、推理小説、恋愛小説）、随筆、自伝、地誌、名所案内書や都市行政機関が出している資料などがある。特に、70年代の後半から、東京・江戸ブームの流れにしたがって、東京の歴史に対する関心が高まり、明治時代からの東京の成り立ちの理解を深めようとする書物が数多く刊行された。

しかし、東京を文学的に描写することの基本的な問題は、昔の建築物がわずかしか保存されていないということである。都市景観と風景も随分変わってきたため、建築物以外の過去へのアクセスを開く必要がある。現代の東京には、そのような過去へのアクセスを開くジャンルがある。それは東京散歩コースを提案する書物、つまり、散歩の構造をとりながら東京を案内する書物である。そういう本を手にして東京を散歩すると、現在の地形から東京の現在と過去の姿が同時に読み取れる。散歩という身体のアクティビティは、東京の歴史を物語にする一方、

⁹ ベンヤミンが近代ないし近代都市を分析した『パサーージュ論』と『ボードレール論』の中でフラヌールを重要なキーワードとして使用した。日本語訳があり、ヴァルター・ベンヤミン著、今村仁司[ほか]訳『パサーージュ論』岩波書店、1993-1995、pp. 1-5。

¹⁰ たとえば、藪野健『東京2時間ウォーキング―歩く、感じる、描く』、中央公論新社、2002、人文社編集部企画・編集『切絵図・現代図で歩く江戸東京散歩』、人文社、2002。

他方では、東京を散歩者のものにするストラテジーでもあるのである。

5 東京散歩の元型：永井荷風 (1879-1959) と『日和下駄』

日本の近代文学において初めて新しい都市体験をしきりに求めたのは、永井荷風であったと言える。荷風は、自分のことを荷風散人と呼称した。散人という表現はとても意味深く、フラヌールのイメージとも関連している。散人もかなり独立した立場でフラヌールのように気ままに都市空間を散策する。実際、荷風は、毎日と言っていいほど町に出かけ、ノートと写真を撮りながら東京を歩き回った。

当時の東京は近代化しつつある、つまり、森鷗外の言葉で言えば、普請中の東京である一方、他方では江戸時代の雰囲気を残す地域がまだたくさんあった。荷風の個人としての生き方だけでなく、彼の作品に登場する人物の生き方と物事の考え方は、ベンヤミンが形容したフラヌールと多くの点で共通している。荷風の主人公は、都市空間の散歩者と都市生活の観察者の役を演じている。彼らはフラヌールのようにゆっくり東京を歩き回り、しばしば昔を回想するのである。

名所と盛場の形成について

ここで、日本の文化と文学における、空間の表像地図を作る一つの方法について、つまり、名所と盛り場の意味について考えてみたい。名所は、伝説ないし歌や物語で名高い土地であり、景色もよいことで有名な所である。名所をつくることは、結局、都市空間の中で昔から現在にいたるまで絶えず行われてきた歴史の出来事ないし文化的現象などの充塞をえり分ける方法である。盛り場とは、人が多く寄り集まり、盛っている活気に満ちた都市空間であり、風俗、流行、情報、歓楽の中心地でもある。江戸では、両国、上野広小路、浅草などが代表的な盛り場

であった。かつて江戸は水路の多い都市だった。特に江戸の下町には水路のネットワークが広がっており、橋も多かった。江戸の名所は、水辺都市と呼ばれる江戸と密接な関係をもっていた。その名所はたいてい水辺つまり隅田川と運河の近くにあった。

しかし、近代の都市開発と工業化によって江戸の水路が道路に転用され、運河が埋め立てられることが多くなっていった。江戸の川、堀、運河の水路のネットワークは次第に小さくなっていき、江戸の本来の構造と都市景観も消えそうになった。そういった都市空間と風景の変遷を背景として、江戸・東京の名所の二つのグループが形成されてきた。それは、江戸時代の都市文化を代表する名所と、近代日本の東京を代表するいわゆる新名所である。明治時代の東京の新名所の有名な例の一つは、Little London、つまり丸の内である。

荷風の東京の描写戦略も、名所による東京空間の表像地図に依存する。しかし、荷風の作品には、明治時代の新名所、たとえば銀座や丸の内などについての記述はあまりない。荷風の東京は、当時の東京案内書、たとえば東京都市が1907に出した『東京案内』¹¹とは完全に異なる。荷風が特に興味を持っていたのは、文明開化の枠組み以外の空間であった。それはつまり、近代の進歩主義あるいは市区改正政策以外の地域であった。そういう地域を発見するために、荷風は下町の裏道や路地を散歩しながら、下町の盛り場、住民の地域、社寺、墓地などを歩き回ったのである。

『日和下駄』

荷風の東京の捉え方を典型的に表している作品は、1915年に刊行された『日和下駄』という随筆集である。¹² 荷風は『日和下駄』に『一名

¹¹ 東京市市史編纂係編『東京案内』明治文献、1907.

¹² 『荷風全集』岩波書店、第11巻、pp. 109-189.

『東京散策記』というサブタイトルをつけた。『日和下駄』の全体の構造は、東京の散歩の様相を呈している。『日和下駄』は、近代東京の文化的ないし空間的周縁を案内する。それはつまり、まだ近代化されていない江戸時代の雰囲気が残っている地域である。彼の東京は、忙しい近代東京とは対照的に、のんびりした別世界のように描写されている。荷風が特に焦点に集めるのは、明治以前の都市景観とその都市景観を作り出した自然と文化の現象である。荷風は『日和下駄』のはじめのところで、町歩きの良さをほめたてている。『日和下駄』は、東京の歴史と地理の多層性と、風物と風俗の多様性、そして近代化によるそれらの変容を記録した随筆である。

荷風の東京へのアプローチの興味深い点の一つは、荷風が東京の町を歩き回る時に、西洋の地理学の影響を受けた新しい地図ではなく、「江戸切絵図」という江戸時代の地図を利用するところである。

『日和下駄』の目次を見ると、荷風の志向が明らかになる：第1『日和下駄』、第2『淫祠』、第3『樹』、第4『地図』、第5『寺』、第6『水』、第7『路地』、第8『閑地』、第9『崖』、第10『坂』、第11『夕陽』。つまり、いくらか近代化が進んでも変容しない、今でも江戸・東京の土台を作るものが残っている。荷風は、それらの近代化に対しての抵抗力と永続性を記録した。そういった江戸・東京の土台になるものは自然と地理の現象であり、ほかには、昔から江戸にあった社寺と庶民が暮らしている地域である。そういった日常生活の都市空間は、主に路地である。荷風によると、江戸のいきおいと生産力は、主として江戸の狭い路地と裏通りにあった。

次の引用は、『日和下駄』の路地についての記述である。荷風は路地をとて雅語的な表現で描写する。

「鉄橋と渡船との比較からここに思起されるのは立派な表通の街路に対してその間々に隠れている路地の興味である。擬造西洋館の商店並

び立つ表通は丁度電車の往来する鉄橋の趣に等しい。それに反して日陰の薄暗い路地はあたかも渡船の物哀にして情味の深きに似ている。路地はそれらの浮世絵に見る如く今も昔と変わりなく細民の棲息する処、日の当たった表通からは見る事の出来ない様々なる生活が潜みかくれている。佗住居の果敢さもある。隠棲の平和もある。失敗と挫折と窮迫との最終の報酬なる怠惰と無責任との楽境もある。すいた同士の新世帯もあれば命掛けなる密通の冒険もある。されば路地は細く短しといえども趣味と変化に富むことあたかも長編の小説の如しといわれるであろう。」¹³

荷風の路地は、反近代的な名所のようなものである。荷風の美的な表現は、当時の路地論とまさに対照的である。明治時代の市区改正政策の立場から見ると、路地は、困窮の象徴であり、反文明的で不衛生的などとして、近代都市計画の枠組みに入れられない空間だったからである。

荷風が『日和下駄』を書いた頃、路地は、細民だけでなく一般庶民にとっても、一番重要な生活空間であった。しかし、当時、東京の発展によって、路地がだんだん取り払われ、その土地が新しい、最も近代的な住宅と大通りに建て替えられていく気配がすでに感じられていた。『日和下駄』は、近代日本の地理文学を代表する随筆として、カノン化されて、東京文学のモデルになったのである。

6 木村荘八 『東京繁昌記』

荷風の歩んだ道をたどったのは、木村荘八であった。木村荘八は、洋画家、日本画家、挿絵画家、随筆家の顔をもつ、才能豊かな人物であった。木村は日本橋に生まれた、根っからのいわゆる東京っ子であった。木村も荷風と同様に、東京の風俗の変遷に関する随筆、評論などを数多く執筆した。木村荘八の文学作品は、関東大震災のあとから1955年まで、30年以上の長期間

¹³ 『荷風全集』岩波書店、第11巻、p. 152.

にわたって、東京の変遷を記録している。代表的な作品は、昭和22年の『東京の風俗』と昭和33年の『東京繁昌記』である。¹⁴

『東京繁昌記』は、東京の烈しい発展とそのマイナス面を論じる東京論である。木村は、戦後の東京湾の開発を背景にして、陸の東京の進出と拡大を書き留めていた。木村も、東京の水路とそれらに沿って工業化された地域で暮らしている庶民の暮らしの有様に興味をもっていた。一見すると『東京繁昌記』は五十年代の東京についてのルポであるが、実はこの作品は、東京の中の江戸を見出していくようなかたちになっている。木村の東京は、江戸時代から名所として知られている場所と、近代東京を代表する地域いわゆる新名所から成り立っている。そのなかには、銀座、日本橋、芝、浅草、深川、向島、佃島などがある。

荷風との共通点は様々である。例えば、木村も、路地に保存されている昔の生活文化に興味をもち、東京のあらゆる路地を歩き回った。木村もまた、東京に残っている路地も間もなくすると取り壊されてしまっている恐れがあると指摘する。木村は東京を描写するのに文と挿絵に頼っている。挿絵のモチーフは様々で、そのなかには工業地帯の景観、庶民の生活の風景、建物の建築様式のディテールなどがある。『東京繁昌記』における東京空間は陸の東京と水の東京に分けられており、それぞれの特定の町並みと風俗、特に日常生活のあり方についての考察が多い。『東京繁昌記』は特に水の都市から陸の都市への変遷が見られる地域を案内する。

木村があくまでも東京の本来の水路都市としての構造にこだわっていることは第一章で明らかになる。第一章の題目は『隅田川兩岸一覽』で、それは、葛飾北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』を想起させる。¹⁵ 北斎は19世紀の初め頃に船に

乗って隅田川沿いの地域を見学し、そこで見た庶民の風俗などを浮世絵の題材にした。佃島から柳橋までの、富士山を拝みながらの船旅であった。

その150年後木村は、北斎のように、隅田川沿いの地域をモーターボートで見学した。しかし、北斎と違って、木村は、隅田川沿いの名所と庶民の風俗にはあまり触れず、というより主に、隅田川の汚染状況を詳報する。たとえば、子供のころ隅田川で泳げたが、50年代の隅田川は汚染されてしまって、泳ぐことはとてもできないと指摘する。木村の船旅の終点は、佃島である。木村によると、佃島では江戸時代の風俗が昔のまま残っているが、隅田川の汚染によって月島の住吉神社の神輿船渡し行事は存続が危うくなっているという。また、江戸時代、白魚の漁は隅田川の名物であったが、現在は捕れなくなっているという。

50年代の佃島はまだ路地の多い街であった。『東京繁昌記』にも、路地についての記述がある。

7 小林信彦の『三部作』

東京の文学には、自伝と場所の歴史との関係を表現する作品がたくさんあるが、それらを「回想的自叙伝」ひいては「自伝的東京論」として取り上げる。そういう文学は、絶えず変わっていく都市空間と歴史の出来事と個人の記憶・回想との複雑な関係を題材にした自伝であると言える。現在の日本では「自伝的東京論」は東京文学の重要なジャンルである。その代表的な例として、小林信彦のいわゆる「東京三部作」を少し紹介したい。

小林は、1932年に東京の日本橋で生まれた。小林は数多くの文学作品、随筆、映画・文学評論などを執筆した。小林の「東京三部作」は次のとおりである。

- 1) 1984年に出版された『私説東京繁昌記』
- 2) 1992年に出版された『私説東京放浪記』

¹⁴ 木村荘八「東京繁昌記」『木村荘八全集』講談社、1982-1983、第4巻、pp. 183-346.

¹⁵ 木村荘八「東京繁昌記」『木村荘八全集』講談社、1982-1983、第4巻、pp. 191-218.

タイトルは林芙美子の『放浪記』を暗示し、都市散歩とフラヌールのモチーフを取り上げる。

3) 2002年に出版された『昭和の東京、平成の東京』

この三部作は、60年代から現在までの東京の歴史と作家自身の人生を記録したものである。その背景は、東京空間の激しい変遷である。それは特に、戦後日本の高度成長による東京風景の膨大な変化である。東京は膨張し続け、一方、都内の区域は凝縮された。昔から残っていた民家や路地などが取り払われ、その代わりマンションが数多く建設された。新式の高速道路がつながりのある町と住宅地を分断してしまった。永井荷風と木村荘八が描いた路地の特有の風情が、段々消えていってしまいそうになった。

小林の三部作の中で特に興味深い作品は、『私説東京繁昌記』である。小林は、東京の現状を記録するために、荒木経惟という有名な写真家と一緒に散歩に出かけた。

荒木の写真には、町の日常の風景を撮ったものが圧倒的に多い。路地の写真も何枚もある。『私説東京繁昌記』の記録性を理解するには、1984年に出版された初版と1992年に改訂された新版を比較するのがよい。文章は同じだが、写真が違っているのである。

ここで、小林信彦の東京の描写戦略と荷風と木村荘八との関係について考えてみたい。荷風と木村との共通点が特に目立つ。

1) 都市散歩と回想との関係

小林は、東京を散歩しながら、昔の出来事、昔の町並みや都市風景、自分自身が経験した物事などの回想にふける。小林も東京人の立場から、つまり、実際に東京で生まれ育った人として、消えてしまった昔の東京の姿を照らす。彼も東京の烈しい変遷を記録しながら、それを批判する。

2) 『私説東京繁昌記』の目次は一目で見ると、普通の東京案内書のように見える：

序章『山手と下町の距離』、第1章『赤坂・青山』、第2章『原宿・表参道』、第3章『六本木界限』、第4章『四谷三丁目付近』、第5章『新宿タイムトンネル』、第6章『銀座・佃島』、第7章『渋谷・代官山』、第8章『池袋・神楽坂』、第9章『浅草・谷中』、第10章『神田・神保町』。第11章『大川端・人形町』、終章『八年ののち』。

浅草、日本橋、新宿、六本木などという区域は誰でも知っているはずである。しかし、小林は新宿などの新名所も実際あまり扱っていない。彼は文字通り、表通りから次の横町に入って裏道を歩き回る。つまり、路地裏に興味をもっているのである。

8 現代日本における散歩文学、タウンウォッチングと路地発見

私がここで指摘したいのは、回想的都市散歩文学とは、近代都市計画の反論のようなものとして読み取られるということである。明治以降の東京は、新たな始まりと繁栄する未来の象徴であると同時に、破壊と墮落の象徴でもある。こうした東京のイメージは、それぞれの時代における過去の解釈つまり「昔」のイメージとの比較に基づいてつくられている。現代の東京文学における「昔」の強いイメージは、現代は忙しいのに対して昔はのんびりしていたというものである。散歩という行動は、東京の過去と自分自身の過去を獲得する方法である一方、他方では、余暇活動でもあり、のんびりすることでもある。荷風と木村荘八と小林信彦が示すように都市を散歩することは、民俗学的な行動でもあり、またタウンウォッチングでもある。現代日本では、散歩と町歩きなどの現象には、様々な意味が含まれている。

たとえば、東京を歩き回る行動は、自分の故郷を発見することである。故郷は、たいてい、路地で見出される。その例の一つは、川本三郎の『私の東京町歩き』である。川本が扱ってい

る場所は主に路地である。¹⁶ 文学散歩も散歩の一種である。文学作品を読みながら小説の舞台を見学するというタイプの散歩である。¹⁷ 最近、江戸切り絵図—いわゆる“timetrip maps”—を手にしながら東京の中の江戸を発見する、そういう案内書も何冊か出版されている。¹⁸ 案内されている場所の中には、しゃれていないあるいは不便であるとかプレステージが低いとみなされてきた細長い暗い裏道と路地も数多くある。それに関連して、荷風の『日和下駄』も東京散歩のモデルとして人気があるようである。¹⁹

9 結論

現代日本の路地論の中には、グローバル化された東京メガロポリス以外の、東京らしいあるいは日本型のアーバニティーの形成を論じるものが多い。結局、路地論とは、サステイナブルな都市、街づくり、市街地の歴史的建築の保全とアメニティ再生などの論理の枠組みでの議論なのである。都市散歩論も、まちづくりなどのような都市再生の対策に対する問題意識や活動への参加意識の高揚を目指していると思われる。

現代都市論における路地の意義は、日本型都市再生のあり方を探るうちにいい生活が可能になる都市空間のモデルとなることにあると言えよう。近代化の波に乗った近代日本では「時代後れ」の象徴であった路地は、今は「味わい深い」空間として位置づけられる。路地は、歩行者中心のヒューマンスケールの魅力ある都市空間である。路地は人々をつなぐコミュニティ空間であり、共有空間としての路地の価値を再認識することは、ただノスタルジーに浸るのでは

なく、これからの新しい路地および新しい日本型都市空間はどうあるべきかを考えていくきっかけになると思われる。

そうすると、都市散歩文学の役割は、その発想を読者に伝えることだということになる。現場を観察し、回想に耽りながら都市空間を歩き回ることによって、環境・歴史と個人の記憶・回想・未来への期待との複雑な関係が結ばれていく。そのような関係を物語にすることが、都市散歩文学の役割なのである。都市散歩文学を読むことは、結局、外来人口の多い日本の都市を自分の故郷にすることなのである。



¹⁶ 川本三郎『私の東京町歩き』武田花写真，筑摩書房，1998.

¹⁷ 例えば，中谷治夫『東京文学の散歩道』講談社，2004.

¹⁸ 人文社編集部企画・編集『切絵図・現代図で歩く江戸東京散歩』，人文社，2002.

¹⁹ 岩垣顕『荷風日和下駄読みあるき』街と暮らし社，2007.